
アルカニックと星

タケダユキコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカイックと星

【Nコード】

N2995H

【作者名】

タケダユキコ

【あらすじ】

他人でもありメル友でもある不思議な関係を保っていた大学院生の智志と年下の優貴。ある雷雨の夜、優貴が智志を家に呼ぶ。優貴の過去をやり直す智志。ふたりの柔らかな空間。

ただ甘い手の温もりが欲しくて。

だっ広い3LDKの新築マンションの一室へ、ここから車で飛ばして20分。彼女は何を求めているのか？出逢ってから事は何事もなく進んでいって、僕たちはまるで兄妹のように、ある時は全くの他人のように、ある時は先輩と後輩のように、話していた。

「クルマ、中に入れてきた方がイイカモ」

「……え」

「雨が強くなってきた」

今夜、僕はこうして優貴^{ゆき}に会いに来たけど、会ってそれからどうするかなんてことは実際考えていなかった。天気予報が今夜の豪雨を知らせていたことは点け放しだったテレビから聞いていたけれど、それは単なる生活の一部で……。今まさに僕のクルマが強い雨に打たれ彼女のマンションの前でポツリと佇んでいる。そんな状況で、雷が怖い優貴の“話”を聞きに来た。車を中に？

殺風景なりビングルーム。テレビと小さなテーブルにパキラが1鉢。優貴は僕に背を向けて窓からじっと外の雨を見ている。窓にうつった優貴の表情はおよそ“何も無くて”、不安のように何も考えしていないようにも見える。遠くのほうでピカッと閃光が走り、その後何秒後かに地響きのような轟きが耳に届いた。その間、優貴は何を考えていたんだろう。僕はどうすれば。

雨がスコールのように降り注ぎ始めた。優貴がつぶやくように言う。

「雷……」

電話では少し早い口調で言った。雷が鳴るから来て、と。でも、今は何も言わない。怖いのか、雷が怖いのか。その後ろにある何かに怯えているのか。僕はテレビを点けて天気予報を再び見た。東北・北海道全域に雷雨の警報が出ていた。「あす未明まで降り続くでし

よう……。人形のように正確にアナウンサーが原稿を読んでいた。優貴もそれを聞いた。フウ、と小さく溜め息をつく。

僕は彼女に近づいていった。

「ここから一番近い……駐車場ってどこかな」

そうたずねた僕の顔を優貴はじつと3秒ほど見つめて言った。

「B1が専用のパーキングになってる。契約してるスペースがあるから、そこを使って」

僕は頷き、一旦部屋を出た。冷気が僕の体を一気に包む。雨のせいで気温が相当下がっているせいだ。僕は少しだけ身ぶるいしたが、それはこの寒さのせいではない。エレベーターで1Fまで下がり、マンションの前に置いてきたエルグランドを指定されたパーキングスペースへ駐車する。エンジンを止めると静寂が僕をおそった。そしてそのまま、僕はしばらく運転席でボウツとしていた。地下の、コンクリートが打ちっぱなしのモダンな作りのパーキング。雨の音が間接的に聞こえる。しっかり作られている筈のこのマンションでもこんなに雨音が響くほど、今夜の雨は強い。ハンドルを両手で握ったまま、そのまま顔をつっぱした。

「何をしようとしているんだオレは……」

この車から出たら、夜は始まってしまふ。ドアを閉めれば、半ばりに真正面から優貴と“会う”ことになる。僕たちがちゃんとこうして会うことなんて、ないんだと思ってた。いや、詳しく言えば、ないともあるとも考えたことはなかった。僕達はこれからも不定期で不思議な“メル友”でいるんだと思っていたし、優貴が僕を“リアルの世界”で必要とするなんて、そんな考えは頭をよぎることもなかった。優貴に淡い恋心を抱いたことがあるっていうのは認めるとしても、この半年間はそれだけを考えるほど僕もヒマではなかったし、研究室や学会の準備で忙しすぎた。

僕はこういう気持ちで彼女と向かい合えばいいのだろう。眼を閉じて暗闇を見る。夜の中で膝をかかえる優貴が居る。僕は意を決して、車のドアを開けた。

優貴の部屋に戻ると、優貴はキッチンに居た。水滴一滴すら落ちていないキレイで無機質なシンクの側に立って、片手にはボルヴィツクのボトル。

「停めてきたよ。ありがとう」

僕は少しだけ笑ってそう言った。優貴がボルヴィツクを手渡す。

「飲む？」

「……うん」

3分の2だけ残ったその透明な液体を僕は半ば無意識に飲み干す。ひどく喉がかわいていた事にその時気付いた。そしてボトルをシンクに置いた瞬間、僕らの眼が合い夜が始まった。雷が再び、とどろく。

「……で、どうしたの。急に」

「何が」

「何がって……優貴が急に言ったんだろ、雷が鳴るから来て、って」

「うん」

「正直、びっくりしてるんだけど」

「今？」

「え？うん、イマ。うん」

かみ合っているような合っていない会話に僕は少しだけ安心した。ただメールがリアルになっただけで何ら変わらないじゃないかって。だから僕がまた少しだけ笑うと、優貴は不思議そうなカオをして問う。

「智志は……何を考えて来たの、」

そういうことを、マガオでたずねる。今日は妹でも、後輩でも、ただのメル友でもない。でも、他人でもない。新しい優貴。

「何って……そうだな。例えば」

窓にしたたる雨を見る。

「もし雷が怖いなら、雷が鳴る原理を説明してもいいかなって考えた。自然には何でも発生理由があるんだよ。ホラ、一応オレ理系

だからサ」

AM0..14。冗談とも本気ともとれるアイマイな返答を試みる。もう緊張はしない。僕は、自分がこの空間に既になじんでいることを自覚した。余計なものは何ひとつとない。僕と優貴と、テレビとパキラと、雷の轟き、夜。そして優貴の、やっと見せた笑顔。

「アハ、何それ」

「……化学だよ」

少し恥ずかしくなって僕は顔をふせた。優貴の雰囲気があたたかいものになった。そして彼女は話しだす。

「私、雷が鳴る度に誰かがいなくなっちゃうような気がする。お母さんが出ていった日に……」

知っている話。既に何度も聞いた過去のトラウマのリンネ。

「父も“ダレカ”の所へ行っちゃって、あの時、独りになったって思った」

だから雷が“鳴る前”に僕を。

「それで」

「わかったよ」

淡々と話す優貴。少し笑ってるけどそれはきつと僕が優貴の中での“リアル”だからで。わざわざそんな話を急にするのは彼女らしくもあるんだけど、でも彼女が云いたいののはたださみしいからとか怖いからとか、そんな理由ではないことに僕は気付いていた。だからこれ以上優貴が口を開くののをさえぎる。僕は未だキッチンに立つ優貴の手をひっぱり、リビングへと連れて行った。

「独りじゃないから、大丈夫だよ」

明日の正午までに提出する課題を送り忘れたことに気付いたが、それは朝イチに直接届けばいい。車で直接大学へ行こう。今はただ、何も話さず居ればいい。優貴がなぜ“僕”を呼んだのかわかった気がした。“存在感”はバーチャルでは得られない。かといってリアルすぎる人間でもなり得ない。僕は優貴の鋭い感覚に焦がれている部分もあるのかもしれない。そしてこの――アルカイック・

スマイルに僕はやられる。

「ねえ、智志」

「うん？」

「……今日、一緒に寝て」

大雨の空に星が見えた気がした。この子には勝てない。

なぜ僕が、激しい雷雨の夜、急に女の子に呼ばれて「一緒に寝て」と言われているのに——“本当に寝ない”かって。それは理屈ではない。

僕らは優貴の部屋にある広いダブルベッドの中に居た。そしてある日のように、くだらないおしゃべりをする。

「智志はさあ、お父さんやお母さんにこうして添い寝してもらったことある？」

「そうだなあ……小さい頃にね」

「……安心したでしょう？」

「小学校に上がる前だったかな、怖い夢見てさ、思わず父さんと母さんの間にもぐりこんだことがあったよ」

「1回だけ？」

「いや、何度も。その頃は父さんも家に居たし。ホラ、ここ何年か単身赴任してるからさ。今思うと恥ずかしいけどね。でも……」

「でも？」

「今思うよ。そういう経験って……必要なコトだったんだなって」
そういうのを知らずに育った優貴に、僕は何をしてあげられるだろう。

「それは女のヒトと寝るのどちらがう？」

「あのね」

「ナニ、」

「全く違うよ」

僕は寝返りをうって、彼女の方を見る。優貴はただまっすぐ天井の“星”を見つめていた。プラスチックの、蛍光に光る星。

「もっとずっと本能的に、安心するんだ」

「……、」

優貴は何か言いかけたように思えたが、そこで口をつぐんだ。ただ雨の音が僕の耳と優貴の心をいたずらに満たす。

ベッドの中、遠くも近くもない距離感を保って、だけでも僕らは確かにお互いの過剰な存在感を認識していた。僕らはあの日、あの小さなJRの駅で“何となく”出逢った。そしてそこから何度もメーイルをして、お互いをリアルに生活に入れることなく不思議な関係は続いていた。優貴が、ブランケットの中で僕の腕をぎゅっとつかんだ。まるで小さな子供みたいに。

その夜、僕に性欲というものは全く起こらなかった。何故だかわからなかったけど、それは多分優貴の中性さのせいだ。セリフだけを聞けば女の子、でも口調はいつも感情がどっかに行っていて、おまけにアルカイック。だから僕はここまで優しくできたのだろう。

「優貴……こっちおいで」

あくまでも優貴から見た優しさだけ。きっと彼女の両親がすべきだったことを今さら与える。手をつないで頭を抱き髪をなでる。いい香りがした。優貴は何も言わず、ただ僕の胸の中に居た。そのうち寝息が聞こえてきた。外ではまだ雷が鳴り続けている。けれどちっとも気になどならない。

最後に女の子を腕の中に入れたのなんていつだったっけ？——僕はそんなバカなことを考えながらしばらく星の天井を見つめていた。そしえ星の光が絶えた刻、僕も眠りに落ちた。ふたりで一緒に夜を越えた、初めての日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2995h/>

アルカイックと星

2010年10月8日15時59分発行